

3 手良小学校研究まとめ

(1) 体育科学習指導案

手良小学校 5年1組 男子7名 女子11名 計18名

授業者 柳澤侑哉

1 単元名「フィルダー・ベースボール」

2 運動の捉えと子どもの実態

(1) ベースボール型ゲーム（フィルダーベースボール）の中心のおもしろさ

静止したボールやゆっくりとした速さで投げられたボールを打つ攻撃や、捕球したり送球したりする守備などのボール操作と、チームとして守備の隊形をとったり走塁をしたりするボールを持たないときの動きによって得点を競い合うこと。

(2) 子どもの実態

- ・3年次で学習してきたベースボール型ゲームとして、ティーボール（ティー台を使ってボールを打つ）の学習を行った。
- ・5年次1学期に行った体育に関するアンケートでは、学級の約90%の児童が3年次に行ったベースボール型ゲームに対して「すごく楽しかった」「まあまあ楽しかった」と回答している。しかし、運動の様子を見ていると、得意な児童は積極的にボールに関わろうとしている一方、運動が苦手な児童はボールに抵抗感を抱いているのか、なかなか積極的にボールへ関わろうとしない姿も見られ、アンケートでも「楽しくなかった」と回答している。
- ・自己の技能の向上に夢中になる児童が多く、互いの動きを見合ったりアドバイスをし合ったりするような協働的な学び合いに消極的である。
- ・休み時間にハンドベース（既存のルール）で遊ぶ児童が学級全体の約80%おり、フライアウト時の走者の動きや走者の先回りをしてアウトにする守備の動きを理解している児童が多い。しかし、打つ技能や中継プレイの技能等は未熟な児童もいる。また、ハンドベースに参加していない児童は、ルールの理解も不十分である。

(3) 本単元の中心となる学習内容

本単元では、チームとして守備の連携に関するおもしろさを子どもたちが味わい、ボールを持たないときの動きを作戦を立てて考えることができるように以下の点を学習させたい。

①打球方向から自分の役割を考えること

各打球方向に対して、最少失点で守るための動きを考えることが重要である。チームで記録を確認し、失点が多くなる打球方向とそれに対する守備の動きを考えさせたい。また、捕球位置によって判断（送球する場所やそれぞれが担う役割等）に違いがでることも意識させたい。

②走者の動きを予測して守備をすること

走者を追いかけるのではなく、走者の先周りをしてアウトにするための塁を予測して自分の役割を決定したり、送球する場所を判断したりする意識をもたせたい。

(4) 中心的な面白さを味わうための教材化

- ・飛びすぎたり跳ねすぎたりしないボールを使用することで、捕球の困難さを取り除き送球やアウトにする塁の判断に集中することができるだろう。
- ・攻撃が全員打ち終わったら攻守交代とすることで、両チームともに平等な攻撃/守備の学習の機会を保證できるだろう。2イニング制にすることでスピーディーなゲーム展開が期待できるだろう。
- ・守備の際、アウトをとるために全員に役割を持たせることで、すべての打球に対し全員が最少失点で守るために考えて動こうとするだろう。
- ・タブレットの「スクールタクト」を使用することで打球方向と失点状況が可視化され、自分たちの動きを想起するきっかけとなり、打球方向から自分の役割を判断するための手立てとなるだろう。

3 「フィルダー・ベースボール」のルールと場の工夫（教材化されたゲームルール）

(1) 用具の工夫

○ボール

ミニサッカーボール

○ゲーム人数4～5人

攻撃：4～5人

守備：4人（内野2人、外野2人。内外野は1ゲーム交替制）

○ゲーム時間

1ゲーム2イニング制（攻撃側が全員打ち終わったら攻守交代）

(2) ルールの工夫

〈守備〉

○内野ライン内で打球を捕球したとき

- ・攻撃側のランナー（打者）よりも先回りした塁の守備用サークルに守備側のプレイヤー全員集まり、「アウト～！」とってしゃがんでアウトにする。アウトにならなければ、2周目、3周目と続く。
- ・フライでもバウンド打球でも同じようにアウトにしなければならない。
- ・バッティングティー付近、1.5mのライン内に入って守備のポジショニングをすることはできない。ただし、打撃後のボールはライン内に入って捕球してよい。

○内野ラインを越えて打球を捕球したとき

- ・捕球した地点から、アウトにする塁のサークルにボールを送球してよい。
- ・ランナーよりも先回りした塁のサークルに守備側の内野2人が集まって「アウト～！」とってしゃがんでアウトにする。

〈攻撃〉

- ・フェアゾーン（1塁と3塁ラインの間）の角度は90度。空振りをしたり打球がフェアゾーンに入らなかったりした場合はファウル。4回ファウルを打つとアウト。打球に納得がいかない場合は、打ち直し（1回のみ）も可能。打ち直しをする場合は、ファウル扱いとする。
- ・打撃をしたらフラフープにバットを置いてベースランニング。アウトになるまでに進塁できたところが得点となる。たとえば、2塁まで進塁して3塁でアウトになれば2点、3塁でアウトにな

れば3点、ホームで4点。ホームまでにアウトにならないければ2周目以降に続いていく。2周目は、ネクストバッターがリレーしてランナーとなる。

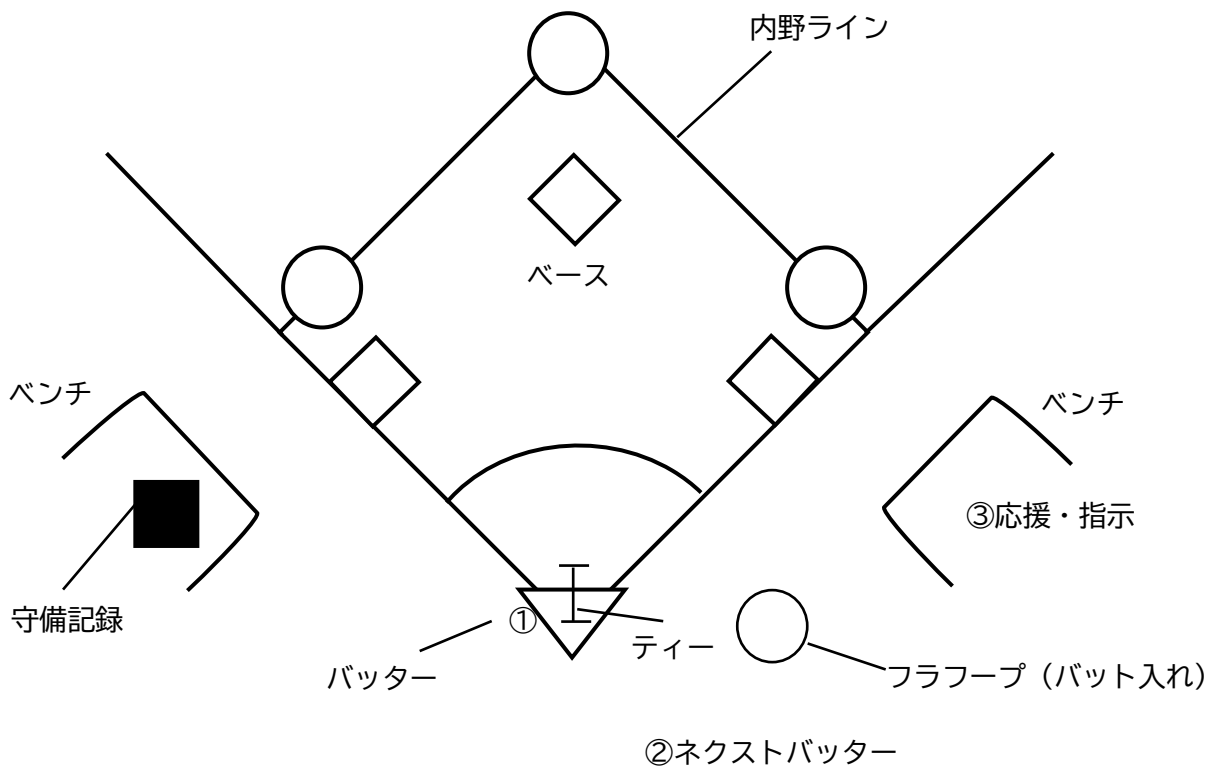
- ・攻撃側チームのメンバーは、①バッター、②ネクストバッター、③応援・指示係の役割をローテーションしていく。
- ・バントはありとする。

〈その他〉

- ・ゲームはセルフジャッジで進行する。同時はアウトとする。ジャッジに迷った場合には両チームのメンバーのジャンケンによって決める。

(3) 場・コート の工夫

- ・塁間：12m
- ・ベースはランナーのみが使用する。
- ・各塁（1～3塁）の後ろにおかれたサークルを結んだ白線を内野ラインとする。
- ・バッティングティーは、本塁の前に置く。



(4) 資料・学習カードの工夫

○学習カード（タブレットを使用する）

- ・チームとして上手くいったこと、課題となることやゲームの記録を、短時間で振り返ることのできる学習カードを用いる。

- ・スクールタクトを活用して、前時での活動内容や次時への課題等、確認しやすいようにし、授業後にアンケート調査も実施する。

(5) ドリル練習の工夫

○単元を通して行うドリル練習

①投・捕のドリルゲーム → ワンバウンドでの送球を意識する。

- ・一定時間内での塁間のボール回しを行う。
- ・ワンバウンドでの送球を意図的に強調して取り組むことで、送球・捕球の安定性が向上する。

②中継のドリルゲーム → 打球方向によって適切な位置で中継プレイができるようにする。

- ・ベースカバー者が遠くにボールを投げ、捕球者が拾い中継者に送球する。中継者はボールをベースカバー者に送球する。
- ・慣れてきたら捕球者・中継・ベースが直線になるような位置取りができるように練習する。

③打のドリルゲーム → 腰の回転を使い手首の返しやバットのしなりを意識できるようにする。

- ・スポンジティー台を打つドリル。
- ・はたきバットを使った素振りドリル。
- ・新聞紙ボールを打つドリル。

④走のドリルゲーム → 効率的なベースランニングができるようにする。

- ・2チームに分かれ、ベースランニングリレーをする。(片方は本塁、他方は2塁からスタート。ボールをバトン替わりに手渡す。)
- ・1周したら、次の走者へボールをわたす。

4 子どもの動きの予想とゴールイメージ、課題の決め出し

(1) 予想されるゲーム様相

① 単元序盤：「どこでアウトにするか」チームで共有しよう！

初めに「修正版並びっこベースボール」を学習する。打球状況に応じてどこでアウトを取るかということについて、チームで話し合い作戦を立て始めるだろう。特に、「外野手を越える打球が大量失点に繋がる」ことに気づき、バッターの打力によって守備位置を工夫し出すだろう。また、「捕球する人」「先にアウトゾーンに集まる人」という役割行動の必要性や、アウトを取れなかった際の「動き直し」の方法について気づきチームで実践していくだろう。

② 単元中盤：「フィルダー・ベースボール」に慣れよう！～外野プレイで失点が減らそう～

「フィルダー・ベースボール」の学習では、内野プレイと外野プレイの違いに困惑するだろう。特に外野プレイは「並びっこベースボール」と役割行動が違うため、序盤はルールに慣れず、外野プレイでも送球せずにボールを持って走り出す子もいそうだ。そのため、捕球後の役割行動や判断

に関わった声かけをし出すだろう。送球時には、距離に応じて送球の方法を変える姿も見られそうだ。

外野手を越える打球では、中継プレイの必要性を感じ、中継者の最適な位置取りについてチームで話し合いが生まれそうだ。守備側の工夫に対して、攻撃側は「バント攻撃」の有効性に気づき、長短を織り交ぜた攻撃が展開されていくだろう。

ゲームに慣れてくると、外野プレイの工夫（役割行動や判断のスピード、打球処理、中継、ベースカバーの仕方）によって失点を減らせることに気づくだろう。

③ 単元終盤：チームの苦手なプレイを見つけて失点を減らそう！

リーグ戦に向けて失点が多い打球状況を把握し、その対策について追究をしていく。特にライト線・レフト線方向の外野を越える打球に対して、アウトにする塁の判断や中継者の位置取り等の作戦を立てていくだろう。

リーグ戦では、多様な打球状況に対してアウトにする塁の判断、役割行動の決定、スムーズな連携によって、「チームで意図した塁でアウトできること」に喜びを感じながら、ゴールイメージに向けて主体的・協働的にゲームに臨んでいくだろう。

(2) ゴールイメージ

どんな打球もチームで連携。少ない失点でアウト！

(3) ゴールイメージに向けた課題のきめ出し

① 本質的な課題

打球状況に応じて「どの塁でアウトをとるか」「アウトをとるために何が必要か」を考えて作戦を立てよう。

② 予想される技能課題

- ・投、捕、打、走のボール操作技能
- ・ルールを理解
- ・各打者に対する守備位置
- ・打球状況に合わせた判断と修正
- ・中継の役割と適切な位置取り

③ 中位課題（複数時間かけて考えるまとまった課題）

- ・失点を少なくするために、「アウトにする塁」の判断をチームで一致させよう
- ・内野プレイと外野プレイの違いに慣れよう
- ・中継を伴う外野プレイについて確認しよう
- ・失点が多い打球状況に対する作戦を考えよう

④ 単元序盤（並びっこベースボール）で考えさせたい学習内容

○投、捕、打のボール操作技能

- ・距離に応じて送球の方法を変えよう。（投）
- ・正面に回り込んで捕ろう。（捕）
- ・ティーの横に肩幅で立つ。おへその位置にボールをおく。スナップをきかせて打つ。（打）
合言葉「あし横、おへそ、ごき・げん・よう！」

○失点を少なくするために、「アウトにする塁」の判断をチームで一致させよう

- ・「アウトにする塁」を守備位置や捕球位置から考えよう。
- ・アウトが取れなかった際の「動き直し」の仕方を考えよう。

⑤ 単元中盤（フィールダー・ベースボール）で考えさせたい学習内容

○内野プレイと外野プレイの違いに慣れよう

- ・外野手は素早くアウトにするために送球が必要になることを確認しよう。役割行動が増えることも確認しよう。
- ・「内野プレイ」か「外野プレイ」かの判断の共有をしよう。
- ・外野プレイの時の「どこでアウトをとるか」についての判断の流れを確認しよう。
- ・距離に応じて送球の方法を変えよう。(ゴロかワンバンかノーバンか)

○中継の役割について確認しよう

- ・中継が必要な打球状況と適切な守備の位置取りの確認をしよう。

⑥ 単元終盤（リーグ戦）で考えさせたい学習内容

- 失点が多い打球状況に対する作戦を考えよう（特にライト線・レフト線の打球状況について）
- ・ゲーム記録をもとに失点が多い打球状況の分析をしよう。

5 単元の目標

(1) 単元の目標

①知識・技能

「並びっこベースボール」「フィルダー・ベースボール」の行い方を理解するとともに、静止したボールを打つ攻撃や、捕球したり送球したりする守備などのボール操作と、チームとして打球状況や走塁に伴った適切な守備の隊形をとったり、「どこでアウト」をとるかの判断や役割行動を実行したりするボールを持たないときの動きによって、攻守交代が繰り返し行えるゲームができるようにする。

②思考・判断・表現

自己やチームの特徴に応じた作戦を選んだりするとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えることができるようにする。

③主体的に学習に取り組む態度

運動に積極的に取り組み、ルールを守り助け合って運動をしたり、勝敗を受け入れたり、仲間の考えや取組を認めたり、場や用具の安全に気を配ったりすることができるようにする。

(2) 評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
ア ティーに置かれたボールを、腰の回転を使い手首の返しやバットのしなりを使った打撃ができる。	キ チームの課題となる打球状況を選択し、守備位置やアウトを取るベースの選択、役割について考え、練習を行っている。	コ ベースボール型のゲームに関心を持ち、単元の見通しをもったりゲームや練習に積極的に取り組んだりしている。
イ 跳んできたボールを正対して捕球し、狙った場所へワンバウンドを基本に投げるができる。	ク 個人やチームの成果や課題、練習方法等を友だちに伝えた	サ 勝ち負けのみにこだわらず個人やチームの成果や課題に目を向けて
ウ 打球状況と走者の走塁状況に応じて、適切なアウトを取る位置を選択することができる。		

エ 打球状況に応じて自身の適切な役割（捕球送球・中継・ベースカバー）を選択し、動くことができる。	ケ 基本の守備位置から、打者に応じた位置の微調整を考えている。	シ 友だちや相手チームのプレイの良い所を認め、自分のプレイに取り入れたりミスに対してアドバイスや練習をしたりしようとしている。
オ 適切な守備位置や中継の位置を理解し、動くことができる。		
カ 一度決めたアウトの位置からの修正の仕方を理解し、動くことができる。		

6 学習の構想

(1) 時間計画

はじめ		なか①					なか②/まとめ	
1	2	3	4	5	6	7本時	8	9
<ul style="list-style-type: none"> 既習事項の確認 授業の約束の確認 映像確認によるゲーム理解 ゴールイメージの設定 	道具の準備・準備運動							
	ドリルの確認	ドリル						
	本時の課題確認							
並びっこ ベースボール	チームごとの課題確認	フィル ダー・ ベース ボール	チームごと課題の確認				チームごと課題の確認	
	並びっこ ベースボール		ゲーム①				リーグ戦 3 試合	
		全体・チームでゲームのふり返り						
		ゲーム②						
<ul style="list-style-type: none"> ゲームのふり返り 本質的な課題の共有 		ふり返り・片づけ						

(2) 単元展開

段階	学習活動	*指導 ◆評価	子どもたちの意識
はじめ	【学習活動とオリエンテーションにおける教授行為】 <ul style="list-style-type: none"> 授業のすすめ方の確認 チーム発表 新しいゲームの紹介（VTR視聴） ルールの確認 ゴールイメージ（目標）設定 	*学習の約束、授業の進め方を丁寧に確認。	
第1時	【単元のゴールイメージ】 <p style="text-align: center;">どんな打球もチームで連携。少ない失点でアウト！</p>	*映像を確認する際は、子どもたちの気づきに応じて、巻き戻したり、繰り返したりして見るができるようにする。	
第2時	【中位課題】 どの塁でアウトにするか、チームで確認しよう！		

	<ul style="list-style-type: none"> ・コートの確認 ・並びっこベースボール ・並びっこベースボールを終えてのふり返り <p><u>提示していく（予想される）下位課題</u></p> <ul style="list-style-type: none"> i ボール操作やルールに慣れよう。 ii アウトにする塁を守備位置や捕球位置から判断しよう。 iii 動き直しの仕方を考えよう。 	<p>*実際にゲームを行っていく中で、ルールを確認する。</p> <p>・遠くに飛ばす人が打つときには、外野手は後ろに下がった方がよさそうだ。</p> <p>・走者の先回りをすることが必要だ。</p> <p>・アウトにならなかった時は先の先の塁を狙うとよさそうだ。</p> <p>◆ウカコ</p>
<p>なか</p> <p>①</p> <p>第3</p> <p>7時</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・フィルダー・ベースボール ・フィルダー・ベースボールのふり返り ・学習課題の洗い出し ・時間計画の提示 ・大まかな単元展開の共有 <p>【中位課題】「内野プレイ」と「外野プレイ」の違いに慣れよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ドリルの確認 <p>【学習の進め方】</p> <p>○用具の準備、準備運動、ドリル</p> <p>○学習課題の確認（全体）</p> <p><u>提示していく（予想される）下位課題</u></p> <ul style="list-style-type: none"> i チームでアウトにする塁と役割行動の判断を一致させよう。 ii 距離に応じた適切な送球方法を考えよう。 iii 中継が必要な打球状況と適切な位置取りを考えよう。 <p>○ゲーム①→振り返り①（チーム）</p> <p>○ゲーム②→振り返り②（個人）</p>	<p>*実際にゲームを行っていく中で、ルールを確認する。</p> <p>*子どもたちのつぶやきを共有する。</p> <p>*ゲーム中は課題に沿った声かけをする。</p> <p>ゲーム①と②の間に、チームで作戦を考える時間を確保する。</p> <p>・声かけをして、考え（内野/外野プレイ、アウトにする位置）を一致させよう。</p> <p>・打球が外野を抜けたときは中継が必要だ。捕球者の投げる力に合わせて中継</p> <p>*本時の課題のふり返りをチームできるように声かけする。全体では具体的なゲーム場面を想起して考えたり共有したりする。</p> <p>◆イエオク</p>
<p>なか</p> <p>②</p> <p>/</p> <p>まとめ</p>	<p>【中位課題】失点が多い打球状況に対する作戦を考えよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リーグ戦 <p>【学習の進め方】</p> <p>○用具の準備、準備運動、ドリル</p> <p>○学習課題の確認（全体）</p> <p><u>提示していく下位課題</u></p> <ul style="list-style-type: none"> i 失点が多い打球状況の分析をしよう。 	<p>・ライト線やレフト線を抜ける打球が飛んだときは、2周目の1塁や2塁でアウトにできるといいな。</p> <p>・ミスが起こったときの修正の方法をチームで再確認しよう。</p>

第 8 ・ 9 時	○ゲーム①・(分析・ふり返り) ○ゲーム②・(分析・ふり返り) ○ゲーム③・(分析・ふり返り)	*常に先回りの塁を意識できるように声がけをする。 *タブレットを使い、狙う塁のイメージをチームで共有できるように声がけをする。 ◆アキケサ
	○単元のまとめをする →自分たちのチームの良かった点や変化をふり返る →単元の感想を書く	*勝ち負けにこだわらず、学習を通してチームや個人のプレイがどう成長したかふり返ることができるようにする。 *友だちとの関わり方についてもふり返らせたり、感想を発表させたりする。 ◆シ

7 本時案

(1) 主眼

中継プレイの役割や適切な位置取りを学習した子どもたちが、外野を抜ける打球について黒板や示範によって動きを確認したり、タブレットを使って作戦を立てたりすることで、打球状況に応じて適切な役割を選択し、動くことができる。

(2) 本時の位置 9時間中第7時

前時 外野手を越える打球の処理に困難さを感じた児童が、中継プレイに意識を向けることで、失点を少なくするための守備の役割行動について学んだ。

次時 リーグ戦を通して、自チームの課題(失点が多い打球状況)を分析し、作戦を考える。

(3) 指導上の留意点

- ・打球方向と失点の関係をチームで分析するための作戦シート(タブレット)を用意する。
- ・子どもたちが安全に運動することができるように、それぞれのコートで使うもの(ティー台、バット入れ、ベースなど)が適切に設置されたり、整理されたりしているか確認する。

(4) 展開

階	学習活動	予想される子どもの反応	○指導 ・ 評価	時間
は じ め	◇準備運動 ◇道具の準備 ・チームごとに行う。			3
	◇ドリル ・中継練習 ・はたき素振り ・スポンジティー打ち	・塁と捕球者の間に入るとよかったな。 ・手首を返すと強く打てるぞ。	○たくさん練習ができるように、ドリルをローテーションして行う。	5
	◇本時の課題を全体で確認する。	【学習問題】外野を越える打球を少ない失点でアウトにするにはどうすればよいだろう。	○黒板の作戦シートを操作し、効果的な動きを共有できるようにする。 ○タブレットでチームの課題等を確認させる。	5
なか	◇試合①(2イニング)	・ランナーの先回りの塁を	○先回りの塁を意識するよ	12

な	◇チームごとの振り返り (タブレット)	意識して守ろう。 ・連携してボールを送球できるように、中継位置に気をつけよう。 ・ミスが起きたときは、さらに先回りの塁を狙う必要があるかもしれない。 ・外野を抜けたときは本塁までの距離が遠いので、2周目の1塁や2塁でアウトを狙うとよさそう。	うに声がけをする。 ○役割を友達に指示するような声がけがあった場合は称賛する。 ○動きがわからないでいる児童がいたら、作戦シートでもう一度動きを確認するように促す。	5
か	◇試合②(1イニング)	・外野から送球する友達にあわせて、中継する位置を調節しよう。	打球状況に応じて自身の適切な役割(捕球送球・中継・ベースカバー)を選択し、動くことができる。(工)【観察・学習カード】	6
お わ り	◇個人のふり振り返り (タブレット)	・役割の指示を出すと判断のミスが少なくなるね。 ・同じライト方向の打球でも、状況によってアウトにできる塁が変わってることがわかった。	○次時の課題になりそうなゲーム状況が見られたチームには、意図的に声がけする。	3
	◇全体でのふり振り返り	・ライト線やレフト線を抜ける打球は、2周目の1塁や2塁を先回りして狙う。 ・中継でミスがでると失点が多くなる。	○タブレットの作戦シート使って、打球状況による役割行動ができたか確認する。 ○次時に全体で共有したい気づきを取り上げる。	4
	◇片付け			2

(5) 話題にしていきたいこと(本時の子どもたちの姿から)

- 本単元での教材化(手立て)の効果について子どもの様子から
 - ① 教材「フィルダー・ベースボール」。
 - ② ボール・用具
 - ③ スクールタクトによるゲーム分析。
- ゴールイメージに迫るための単元展開及び教授行為(学習課題の把握、ドリルや練習での内部感覚を引き出す言葉がけ、全体でのふり振り返り等)について子どもの様子から
- ベースボール型における運動の楽しみ方を創り出している具体の姿

令和5年度 上伊那保健体育学習指導研究会 授業者ふり返り

手良小学校 柳澤 侑哉

I 授業者の記録（単元記録）

第0時 「どんな打球もチームで連携！少ない失点でアウト！」

オリエンテーションでは、フィールダー・ベースボールのイメージ映像を見ながら勝つために必要なことを考えた。児童からは、攻撃側視点の「たくさん点を取ること」「遠くに飛ばすこと」と、守備側視点の「最少失点に抑えること」「チームで連携すること」などが挙げられた。一人の力でできる攻撃よりもチームの連携が必要な守備に焦点を当て、「どんな打球もチームで連携！少ない失点でアウト！」という単元のゴールイメージを据えた。

第1時 「並びっこベースボールのルールを確認しよう」

「フィールダー・ベースボール」の下位教材となる「修正版並びっこベースボール」を行った。中学年対象の教材であるが、判断の契機が増える「フィールダー・ベースボール」にスムーズに入れるように2時間実施した。

第1時では主にルールの確認をし、難しかったことやうまくいかなかったことの共有を行った。児童の振り返りでは、「どこでアウトにするのかわからなかった」「走者と追いかけてっこをしまい、たくさん点をとられた」という課題が挙げられ、守備の改善に意識を向ける様子が見られた。

第2時 「先回りを意識してアウトにする塁を決めよう」

第2時から、走の技能向上のため「ベースランニングリレー」を取り入れた。

前時の振り返りから「どこの塁でアウトにするか」という課題を全体で共有し、「常に走者の先回りの塁を狙うこと」をポイントとして確認した。

ゲームの中で、先回りの塁でアウトにするために指示を出し合う姿が見られ、アウトにする塁にスムーズに集まることができるようになった。しかし、アウトにできなかった時に走者と追いかけてっこをしまう場面があり、「動き直し」の判断に困難さを感じていた。

第3時 「フィールダー・ベースボールのルールを確認しよう」

第3時から、打の技能向上のため「はたき素振り」を取り入れた。

「フィールダー・ベースボール」のルールや「修正版並びっこベースボール」との違いの確認をしながらゲームを行った。「修正版並びっこベースボール」で学習した、先回りの塁を狙う意識をもつことができていた。しかし、内野プレイと外野プレイの違いに困惑しており、外野プレイでも全員で集まる場面が多く見られた。

児童の振り返りでは、「外野プレイで全員集まってしまう混乱してしまった」という課題が挙げられたが、「指示や役割分担をする必要がある」と対策を考えるチームもあった。また、「先回りできたけれど、ボールをキャッチできずにセーフになってしまった」という課題も挙げられた。

第4時 「内野プレイと外野プレイの違いを確認しよう」

第4時から、投・捕の技能向上のため「ボール回し」を取り入れた。

前時の振り返りから「指示出しや役割分担」がポイントになることを確認した。ゲームでは上位生が積極的に指示を出す姿が見られ、外野プレイでもスムーズにアウトにできる場面が増えてきた。しかし、上位生が捕球者になってしまったり判断に迷ってしまったりする打球状況下では、アウトにする塁がチームで一致せずに大量失点してしまっていた。

児童の振り返りでは、「捕球者以外が指示を出そう」「内野の二人で相談してアウトにする塁を決めよう」という対策を考えていた。

第5時 「アウトにする塁の判断をチームで一致させよう」

第5時から、打の技能向上のため「スポンジティーバッティング」「布ボールティーバッティング」を取り入れた。

前時の振り返りから上位生の指示だけで動くのではなく、それぞれが打球状況アウトにする塁を予測し判断を

一致させる必要があることを確認した。ゲームでは正確な判断ができていない時もあったが、低位生同士が集まって相談する場面や上位生の指示なしでアウトにする塁に集まる姿が見られた。

児童の振り返りでは、「打球が飛んだ瞬間の判断がまだできていない」「内野と外野のちょうど間に落ちる打球の失点が多かった」という課題が挙げられた。

第6時 「チームで約束事を決めよう」

前時の振り返りから大きく判断が変わらない打球状況（内野への打球、外野の正面の打球など）に関して、どこでアウトにするかの約束事を決めた。守備者の走力や肩力によって約束事を変えているチームもあった。

ゲームでは、約束事によって判断が明確化されたので、外野プレイでも2塁や3塁でアウトにできる場面が増えてきた。

児童の振り返りでは、「外野を抜けた打球の失点が多い」という課題が挙げられた。

第7時（本時） 「外野を抜けたときは中継プレイを使おう」

前時の振り返りで「外野を抜ける打球状況での失点が多い」という課題が挙げられ、児童の中で中継プレイの必要感が高まってきた。打球を追わない（ボールを持たない）外野手に役割が与えられていないことに気づき、捕球者と塁の間で中継プレイをする必要があると考えた。

ゲームでは、外野を抜ける打球状況において中継プレイを取り入れ、前時までは8点取られていた打球状況でも5点に抑える場面が見られた。

児童の振り返りでは、「捕球者の肩力や捕球位置によって中継の位置を調節するとうまく中継プレイができる」と、中継プレイのポイントに触れるチームもあった。

第8時 「チームの課題（失点の多い打球状況）について作戦を考えよう」

リーグ戦を行った。第8時から、チームごとに失点の多い打球状況の分析をした。チームの課題として、「外野を抜ける打球状況での失点が多い」「動き直しの判断がチームで一致しないこと」などが挙げられた。

ゲームでは中継プレイのポイントを理解した児童が増え、スーパープレイ（連携して失点を少なくすることができたプレイ）に喜びを感じる姿が多く見られた。

第9時 「チームの課題（失点の多い打球状況）について作戦を考えよう」

リーグ戦を行った。チームごとに作戦シートを確認し、失点の多い打球状況について分析した。ゲームでは、優勝を目指すことによってこれまで以上に失点を少なくしようとする意欲が高まった。特に最終回（2イニング目）では、点差を計算しながら1点でも多く得点し、1点でも失点を少なくしようと作戦をたて、緊迫した攻防が行われていた。

単元全体を振り返って

○ 打の技能の向上

インパクト時の手首の使い方を身につけるための「はたき素振り」、腰の回転によってバットを強く振り抜く感覚を養うための「スポンジティーバッティング」「布ボールティーバッティング」等を単元序盤から中盤にかけて取り入れたことで、低位生のバッティング技能の向上が見られた。単元序盤では内野を越える打球が見られなかったが、単元後半では外野を抜く打球が何度もでた。

○ ボール選び

ボール運動の学習では、特にボール選びが大切になることを改めて感じた。ベースボール型では、「キャッチしやすい」「投げやすい」「弾みすぎない」「空気抵抗を受けづらい」という守備の側面と「バットに当てやすい」「外野を越える飛距離がでる」「打感が重すぎない」という攻撃の側面から考える必要があった。児童の実態とボールの特徴がマッチすることで、子ども達が楽しみながら学びを深めていく環境をつくることができると感じた。

手良小学校 黄色チーム記録

辰野西小学校 村澤陽介

1. 子どもの様子（追究の様子や動きの様相の変化）

(1) 準備～課題把握

ジャンボリミッキーの鬼ごっこを終えて、ベースランニングに入ると、どの子も大回りを意識した減速しない走りを心がけることができていた。その後、バッティング練習に入ると、バッティングの得意な①の子が、③の子に立つ位置やボールを見ることをアドバイスしながら練習に取り組む姿が見られた。

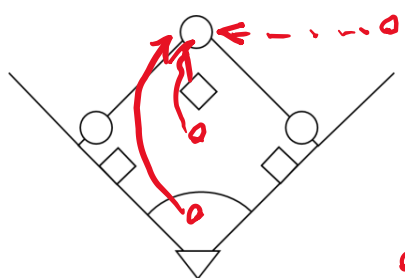
課題把握の場面では、映像を確認する際に、①が（ボール捕球者との）間に入ることに気づく発言をチームの中でしていた。その後、何度か、動画を確認しながら、中継に入ることを確認すると同時に、内野なら2塁、外野なら3塁かホームという約束事を確認していた。



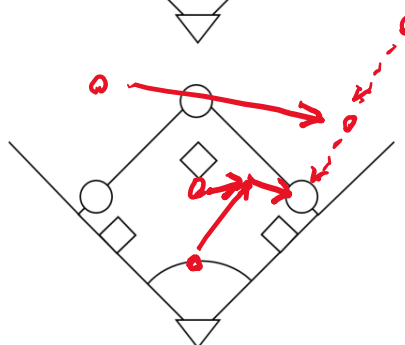
(2) ゲーム

ゲーム中は、①の子の声がけを中心に特に外野の守備位置を調整したり、「どこでアウトを取るか」を声がけしたりする様子が見られた。

【1ゲーム目：打球状況とアウトの位置が一致したプレイ】 ……送球 ——守備の動き



ライト線の外野の打球を捕球すると同時に、内野の2人がセカンドに移動し、アウトをとる。

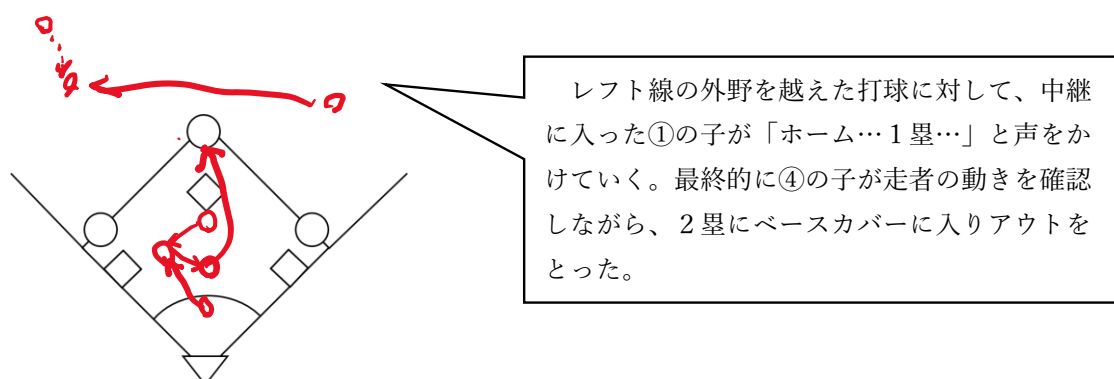


ライト線の外野を越えた打球に対して、レフトの子が中継に入りながら、内野の二人が走者を確認し、1塁のベースカバーに入った。

1ゲーム目が終わると、①を中心にゲーム記録をもとに振り返りを行った。先生も途中で入り、主に外野プレイの送球と中継の位置取りについて確認を行った。

- ①「中継がうまくいってないからもうちょっと中継を…」
- ④「一番多かったのは…（ゲーム記録を見て）7点」「とりそうになったのをとれなかった」
- ①「しっかりととめられれば…体で止めよう」
- 先生「中継はどう？」
- ①「もうちょい、暇な人が近づく」
- 先生「（ボール捕球者が）①君なら？」
- ②「でも（ボールを捕りに行ったら）疲れてるかも…」
- ①「②も肩がいい。俺だったら近づかなくていい」

【2ゲーム目：打球状況とアウトの位置が一致したプレイ】 ・・・・送球 ――――守備の動き



(3) ふり返り・授業後インタビューや・学習カードの記述

グループでタブレットに以下の通り記入をした。

「中継がつよく投げられない人には、近くから中継をわたす。強く投げれるひとは、遠くから中継を投げる」

2. 子どもの様子からの考察

(1) 本単元での教材化(手立て)の効果について子どもの様子から

本実践の中心教材であった「フィルダー・ベースボール」は本時の子どもたちの姿からも実態にマッチした教材であったといえる。黄色チームは①の声かけを中心としながらも打球状況や走者を手掛かりに、一人一人が思考し、行動に移していた姿が見られていた。打球に対して「どこでアウトをとるか」「そのために私は(チームは)何をするか」といった戦術的判断をどの子どもも発揮することができていた。また、日常的にベースボール型の遊びに触れあっている子どもたちという実態もあり、基本的な投・捕・打の技能も高いことに加えて、一人1本、バッティングのヘッドスピードやインパクトの力感が強調・保障されたバッティングのドリル練習や、飛びすぎず転がりすぎず、投捕しやすいボールの選択といった教具の工夫が子どもたちの学習を促進していた。

スクールタクトによるゲーム分析についても、子どもたちのゲーム状況を可視化し、ふり返るための手立てとなりえていた。ゲーム間のチームの話し合いでは、ゲーム記録をもとに失点の大きかったプレイを想起し、本時の課題となる「中継プレイ」を窓口に戻ることができていた。(2)にも関わりますが、ゲーム記録をきっかけに教師が適切な声かけをすることで、中継プレイについて、中継者の位置取りについて理解を深め、2ゲーム目の①の子の位置取りのような変化が見られた姿からもゲーム記録と教授行為が本時の子どもたちの学びを深める手立てとなりえていた。

(2) ゴールイメージに迫るための単元展開及び教授行為(学習課題の把握、ドリルや練習での内部感覚

を引き出す言葉かけ、全体でのふり返り等)について子どもの様子から

9時間中の第7時の位置づけに、中継プレイについての学習が位置づいていることが、本時の子どもたちの姿をみると(結果論的になってしまうが)もっと早い時間に位置づいてもよかったのではないかと考える。単元前半に並びっこベースボールを2時間、フィルダー・ベースボールの単元が第3時からという点もあるが、子どもたちのゲーム理解や、野球に関して詳しい知識をもっている児童も多い実態、単元後半のチームごとの思考・判断・表現場面を保障するといった視点からも、並びっこベースボールとフィルダー・ベースボールそれぞれの戦術的知識をより整理し、配置していくことが可能な方向も考えられるのではないかと考える。

(3) ベースボール型における運動の楽しみ方を創り出している具体の姿

本時の子どもたちの姿から、④の子が①の子の声かけをさらに更新する姿、①の子が作戦タイムを経て、中継位置を修正する姿は、獲得していた戦術的知識をゲームレベルに発展させたり、自分のチームレベルに修正したりした姿が見られた。これらの姿は、課題把握の場面で確認した「どこでアウトを取るか」「そのために何をするか」といった戦術的知識(=約束事)がゲームを通して修正・発展され、より洗練された内容になっていく様子といえ、子どもたちの運動の楽しみ方を創り出している姿ではないだろうか。

「運動の楽しみ方を創り出している姿」を中心に据えた、授業観察・授業記録【青チーム】

1. 子どもの様子

(1) 準備～課題把握

① ドリル

- ・ベースリレーでは、一人ひとりが全力疾走でベースを回る。リレーの結果は青の勝利。
- ・塁間のボール回しでは、青②児は野球経験者で体全体を使って力強くボールを投げていたが、そのほかの児童についてはふわっとしたボールで、ベースまで1～2バウンドで届かせていた。青③児については握りが弱いのか投球時にボールが抜けてしまっていた。
- ・バッティング練習では、青②児は“はたきバット”で繰り返し素振りを行い、インパクトの瞬間の感覚を確認していた。青③児はシャトルの上の新聞ボールをジャストミートで打つが、スイングスピードが弱く打球はそれほど強くなかった。

② 課題把握

前時のゲームの様子（打球が外野を抜けた場面）をタブレットで視聴する。

青②児「中継が遠いな」青③児「内野の近くってこと？」

青②児「ボールを捕った人の近くだよ」

青③児「外野で（ボールを）捕った人の近くにいけばいいんだね」

学習問題「外野を抜けていく打球を少ない失点でアウトにするにはどうすればいいだろう」を全体に投げかけられると、

青②児「外野のもう一人の人（ボール捕球者以外の人）が近くに行く」

と答え、ホワイトボードのコート上でボール捕球者と内野の直線上にもう一人の外野を動かす。

(2) 追究（グループの話し合い）

外野を抜ける打球があった場合のチーム内の役割や動きをタブレットのコート図で確認する。

青②児「しょうまくんが打ったら外野までいくなあ」

青③児「（その時は外野の）ひまな人がつなげる。投げる。」

青④児「内野と外野は前と一緒にいい？」

青②③児「いいよ」 * 青①児は話し合いに参加はするが発言はなし。

本時のチームの目当てを確認する。

青②児「バッターによって守備の位置を変える。」

青③児「バッターが打とうとするところへ動くってこと？」

青②児「この人打つなって時は、そっちへ動くってことだよ。」

青④児「あっちのチームは端っこをねらって打つよ」

青③児「端っこ（ってどこ）？」

青④児「この辺」コート図の1塁、3塁ぎりぎりを指さす。

(3) ゲームⅠ ※ゲームⅡ青チームは攻撃のみ

【1回目】内野：青①③ 外野：青②レフト④ライト

	外野／内野 プレイ	捕球位置	アウトに した塁	失点数	
1	外野	レフト 3塁線際	2塁	5	②が捕球、④は自分で判断し2塁の近くで中継、捕球時に②が「2つ(2塁)」と指示
2	内野	2、3塁間	2塁	1	捕球前に②が「2つ(2塁)」と指示
3	内野	バント	2塁	5	2塁セーフで動きなおし3塁に向かうが追いつかず、②の指示でもう一度2塁へ
4	外野	センター	2塁	9	④が捕球、②は④の近くで中継し2塁へ送球するが、捕球ミス。2塁セーフで動きなおす。①が判断して1塁でアウトにしようとするが、②の「2つ」の指示で③は2塁へ。もう一度動きなおし、今度は2塁でアウト。
5	外野	ライト 1塁線際	ホーム	3	④が捕球、②の指示で2塁へ送球するが2塁セーフで動きなおし。①③がそろって動き出す。②もそれを見て「4つ」と指示。

【2回目】内野：青①③ 外野：青④レフト②ライト

	外野／内野 プレイ	捕球位置	アウトに した塁	失点数	
1	内野	バント	3塁	2	全員で2塁をめざすが、打者の様子を見て途中で3塁に変更。②ライトから全力疾走。
2	内野	バント	2塁	1	捕球前に②が「2つ(2塁)」と指示
3	内野	バント	3塁	2	全員で2塁をめざすが、打者の様子を見て途中で3塁に変更。②ライトから全力疾走。
4	外野	センター	2塁	9	②が捕球、②③は捕球後すぐに2塁へ
5	外野	レフト 3塁線際	ホーム	6	④が捕球、②が中継に入り3塁へ送球するが、捕球ミスで動きなおし。①③は2塁をめざすが、打者の様子を見て②が「3つ」と指示。

(4) 追究(中間／振り返り)

① 中間

青②兄「セカンドベースの真ん中辺(バントの位置)の時に点を取られちゃってる」

青③兄「(それに)あっちのチーム、端っこに打つよね」

青④兄「内野は真ん中、外野は外側で守ろう」

※次の試合は攻撃のみだったため、実際には活用されず…

② ふり返り

Tがタブレットの失点（センター付近の「9点」と「7点」）を指さす。授業記録とはやや食い違う。このプレイはどちらも、中継の送球をベースカバーが捕球ミスしたもの。

青③児「内野は外側」

青④児「外野は真ん中」タブレットの失点箇所を埋める発想。

青③児 本時の学習問題とコート図を見て

「中継の距離。中継の距離、どう気をつける？」

青②児「(捕球者が)投げるのが苦手そうな人は近くでもらい、投げるのが得意な人は遠くでもらう」

この後、②児は全体の振り返りでもこのことを発言し、ホワイトボードのコート図で中継者のマグネットを状況を説明しながら動かす。

2. 子どもの様子からの考察

(1) 本単元での教材化（手立て）の効果について

- ・守備にフォーカスを当て、4人全員に役割を振り分けることでひとり1人が主役となって、ベースボール型を楽しみながら追究する姿が見られた。
- ・青チームについては、4人中外野まで打球を飛ばせる子が2人。あとの2人は、内安打ながらも全力で走って3点をねらいに行ったり、相手の送球位置が間違ったりすればさらに多く得点したりしており、ボール／バットの選択、コートの大きさが丁度よかった。
- ・タブレット（スクールタクト）を使ったゲーム分析が、子どもたちにとってシンプルで記録しやすく、またゲームの振り返りの際にどこに打たれて何点とられたかということがわかりやすく、チームの追究に有効に働いていた。

(2) ゴールイメージに迫るための単元展開及び教授行為

- ・攻撃を個人追究、守備を全体追究としたゴールイメージが青チームだけでなく、学級全体によく浸透していたと思われる。勝ち負けにそれほど固執しない点も、このゴールイメージからチーム全体で上手くなろうという意識がよく根付いていたからかもしれない。
- ・課題把握の場面で前時のゲームの様子をタブレットで見合うと、青②児がすぐに中継のこと口にしていった。さらに全体で本時の課題「外野を抜けていく打球を少ない失点でアウトにするにはどうすればいいだろう」が提示されると、青②児が捕球者と内野の位置関係を見て中継者の位置をホワイトボードに示していた。こうしたところから、青チームではすんなりと中継プレイの内容が追究課題として入っていった。その後のグループ追究では、青②児に質問をしたり、青②児の説明に補足したりしながら中継プレイについて追究がなされていた。
- ・ゲームの中で、実際に青チームの中継プレイが見られたのは2回（全10プレイ中）。青②児はその際、中継位置を担当する。青②児は、そのプレイを振り返りながら、全体での振り返りの際「(捕球者が)投げるのが苦手そうな人だったら近くでもらい、投げるのが得意な人だったら遠くでもらう」と捕球者によって中継の位置を変える必要があることを話していた。
- ・ドリルの場面については単元を通してTがさらに積極的に声がけし、とくに苦手な子どもには矯正的なフィードバックを繰り返し行うのがよいか。

(3) ベースボール型における運動の楽しみ方を創り出している具体の姿

青②児「セカンドベースの真ん中辺（バントの位置）の時に点を取られちゃってる」
青③児「(それに) あっちのチーム、端っこに打つよね」
青④児「内野は真ん中、外野は外側で守ろう」

青チームに限らず、攻撃も守備も全力で走っている姿に運動を楽しんでいる姿を感じられた。青チームは、ゲームⅠとⅡの間のグループ追究の際、タブレットを囲みながら、上のような会話をチームで交わしていた。青②児が失点状況（バントの位置）について指摘すると、青③児が他にも失点状況があったことを指摘し、それらに対応する守備として青④児が内野と外野の位置を変えることを提案していた。その後ゲームⅡでは青チームが守備をする時間がなく、実際にそれを試すことはできなかったが、野球経験の深い青②児だけでなく、経験の浅い児童も一緒になってゴールイメージの「少ない失点を目指そう」とする姿が運動の楽しみ方を自ら創り出していると感じた。

(記録者 伊藤達也)

手良小学校 赤色チーム記録

西箕輪小学校 赤澤太一

○子どもの様子から ◎教師のようすから

1. 子どもの様子（追究の様子や動きの様相の変化を時系列に 写真添付可）

（1）準備～課題把握

- ジャンボリミッキーの動きの中に、鬼ごっこも取り入れられていたことで、こどもたちが楽しくウォーミングアップに取り組んでいた。また、準備への移行もスムーズで、その後の補強の準備運動（ベースランニングやバッティングなど）までの一連の流れがクラスに浸透していて、学習への安心感があつた。
- ◎「正面（に移動する）OK！次は前に（ボールを）止めよう。」などの声かけに子どもたちが嬉しそうに反応していたり、うなずいたりしていた。
- チームの仲間だけでなく、その場にいる仲間によく声が飛んでいた。

（2）追究

- ◎これまでの子どものゲームの様子や子どもの感じたことから、中継プレイを課題に据えたことで、前時までプレイに関わっていなかった子どもたちが、自分の役割について考えて守備をしていた。
- ICTに蓄積されたゲームのデータや、これまでの課題を確認することで、チームごとに今日どんな風にかんがりたいかがわかりやすくなっていた。

（3）ゲーム

- ・ゲーム中の子どもの声かけ
 - ・ゲーム記録 ※次ページ参照
- ⇒ボール捕球位置からアウトをとるまでどのようにボールが動いたか
⇒スムーズな連携によって、進塁を防ぐことができていたか
- お願いしますのあいさつに始まり、野球経験の無いであろう女の子でも積極的に意見を伝えていた。特にゲームの直後の作戦会議では活発な意見交流がなされていた。
 - 「だいたいこちら辺に（打球が）飛んだときに点が取られる。」「外野プレイはとにかく2塁を目指そう。」「内野は余裕で越えられるから、外野の位置を見て打つといいかもしれない。」ゲームの最中にも、「今のもっと強く打てばなあ。」「今1塁いけたよね。」といった声。
 - ◎「同じ場所に飛んだ打球なのに、どうして8点と5点って差があるの？」→この問いかけをきっかけに中継プレイの必要感が生まれたように感じます。
 - ◎道具の扱いについて安全に気をつけるような声かけ。
 - ◎2面を1人で指導するには少し広かったか。
 - ◎話し合いの場面では、本時の課題、チームの課題をよく伝えていた。（中心がブレなかった。）
 - どの子も本当によく打つし、走っていた。ナイス！などの声から普段の学習の雰囲気の良いさがうかがえた。

（4）ふり返り・授業後インタビューや・学習カードの記述

- 子どもたちの機器を操作する技能（画像の挿入や、ICTを扱うことの慣れ）は流石だった。
- ◎◎教師の「中継どうだった？」という質問から、「間に入れたのが良かったよね。」「判断の失敗のあとがよかったよ。」「やっぱり、中継もだけど、守る場所を考え直したい。」などと話し合う事ができていた。

○「中継プレイのコツ」については、時間が押していたこともあり、理解が難しそうな児童もいた。

2. 子どもの様子から以下の観点に沿った考察

(1) 本単元での教材化（手立て）の効果について子どもの様子から

①教材「フィルダー・ベースボール」。

- ・フィルダーベースボールの面白さの1つが、「どこでアウトにするか」という判断であると考えたときに、子どもたちの言葉にもあったが、「今のは1塁いけたね」などの、より少ない失点に抑えようという気持ちがもう少し高く持てると良いのではないかと感じた。
- ・教材の選択について、ゲームを行う子どもの様子から、教材としての難易度や子どもたちが感じる楽しさといった点、非常に良かったと感じます。

②ボール・用具

- ・用具の工夫が非常に良かった。子どもたちが打つ楽しさを目一杯感じる中で、守ることの難しさ（打球スピードや、守備の範囲）も少なかった。
- ・ゲームに扱う用具もそうだが、練習のための用具も工夫がなされていて素晴らしかった。

③スクールタクトによるゲーム分析。

- ・素直に、こんな利用の仕方があるのかと驚かされました。参考にしたくなる分析ツールでした。
- ・得点だけでなく、捕球地点や、守備者、打球の動きが分かることで、後から「このときはこうだった」とついつい話したくなる情報に富んでいた。また、過去の記録を素早く振り返ることができる点も良い。

(2) ゴールイメージに迫るための単元展開及び教授行為（学習課題の把握、ドリルや練習での内部感覚を引き出す言葉かけ、全体でのふり返り等）について子どもの様子から

- ・ベースランニングの練習があることで、走者の動きがある程度予測できるようになっていたと感じます。
- ・これまでのふり返りから導き出したチームの作戦（主に守備）を実行しようとする意識が高かった。しかし、その場で相談したり、思いついたことを試したりしたいように見える子どももいた。
- ・打撃ドリルの成果が良く出ていた。
- ・チームに貢献できた！という思いよりも、自分の考えるよりよい攻撃や守備を再現したいという思いが強いように感じました。（とても満足そうでした。）

(3) ベースボール型における運動の楽しみ方を創り出している具体の姿（記録・分析した子から考察する）

・赤4番

自分の狙った方向に打球を飛ばすことに面白さを見いだしていた。内野プレイより、外野プレイの方が得点のチャンスだと考えているようでした。（2点取りたいことが伝わった。）悔しそうな表情もあって良かった。

・赤5番

作戦を立てて攻撃や守備が成功することに喜びを感じていた。自分の役割というよりは、自分の考えた理想の動きを、他の子が再現できたときに興奮していた。その中で、自分が思う最も良い攻撃を毎打席再現しようという熱意があった。

- ・全体の意識として、より失点を少なくするための方法を考え、実践する姿があった。また、走者よりも先の塁にボールを運ぶという意識も高く、守備が素早く動こうとする一生懸命さがあった。

② 4月 ①★ 点口

	白チーム (ジャ) 色	青チーム (ア) 色
1		
2		
3		
4		
5		

- ③ ……投げる、小野が打った
- ④ ……投げる、小野が打った、打った後、打った後、打った後
- ⑤ ……投げる、小野が打った、打った後、打った後、打った後

2月 ①★ 点口

	白チーム (ジャ) 色	青チーム (ア) 色
1		
2		
3		
4		
5		

1. 子どもの様子

(1)準備～課題把握

・ドリル

走塁練習、ボール回し、素振り、ティー打ちを行った。走塁練習ではベースランニングをリレー形式で行い、ベースを踏んでダイヤモンドを1周する感覚が養われる。ボール回しでは捕球者が捕りやすいバウンドで送球→捕球が繰り返されていた。白チームは投能力が高くない子も無理なく投げられていた。ティー打ちではスイングの軌道やバットのヘッドを走らせるなど、繰り返していく中でボールを捉えて飛ばすために必要な要素が身についていくことが期待できる。ゲームの中でもボールを捉えて外野まで飛んでいる打球が多く、一定の効果が出ていると感じた。

・課題把握

前時までのゲームの様子から、外野を越えた、間を抜かれた打球の時に失点が多いことに着目した。振り返りの「外野のひまな人が外野と内野の間に入っていなかった。」という内容から、中継についてホワイトボード上でマグネットを動かして確認、実際のゲーム映像をiPadで視聴し、どのような動きになるのかを確認した。白チームでは動画を確認し、チーム内での言葉によるやり取りは多くなかったものの、「〇〇君が捕ったら△△君が間に入るってことだね。」や、「これ大事だね。」といった声が上がった。中継プレイをする際の人の動きや、重要性を感じたうえでゲームに入ることができた。

(2)追究

白チームはゲーム1を終え、記録を見て失点を少なくできていると感じていた。「端っこ（レフト戦に飛んだ打球）が点取られているけど、うまくいってる。」や、「中継がうまくできた。」と手ごたえを感じる声がある一方で、「何を意識したからよかったのだろうか？」という声もあり、うまく守れた要因には気づいていない様子だった。教師の声がけにより、他チームよりもかなり失点が少なくできているということを知り、自信を深めたようだった。

白チームの失点が少ない要因として、守備位置を細かく変えている点、アウトを取る塁を決める意思決定が早い点が考えられる。外野のかなり深い位置まで飛ばされた打球もある中で、間を抜かれる場面はなく、中継で確実にボールを繋ぐことができていた。ボールが転々とすることなく守れていることが失点を防ぐことにつながっていると感じた。また、飛んだ打球に対してどこでアウトにするのか、打球に追いつくまでに判断できていることで、迷いなくボールを送球または走って運ぶことができていた。前時までのゲーム経験から様々な打球に対する判断の引き出しが増えてきていたものと考えられる。

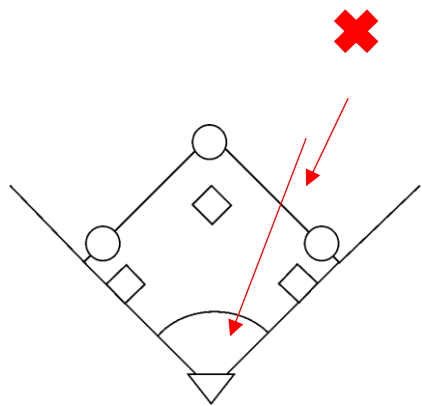
(3)ゲーム

・ゲーム中の子どもたちの声がけ

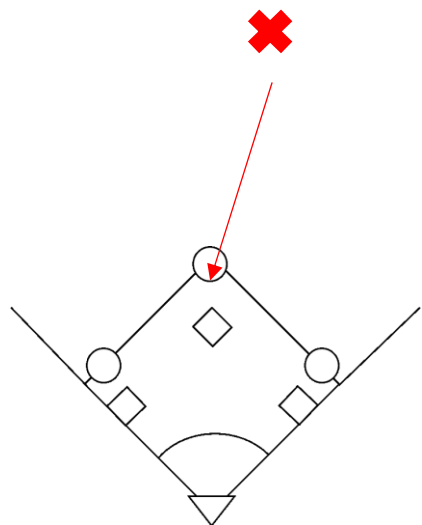
白チームは主に左中間を守る4番の指示でもう1人の外野の位置を決めていた。また、どの塁でアウトにするのかも4番から指示することが多かった。内野プレイで処理に時間がかかった際も、4番の「ホームだな。」の声でアウトにする場所を切り替え、確実にアウトを取ることができた。内野からどこにボールが欲しいのか指示が出る場面もあり、中継プレイでアウトに出来たプレイでは、内野から「ホーム！」の声でボールを繋ぎ、少ない失点に抑えることができていた。中継を必要とする打球の場合、外野がどこでアウトを取るのか判断することは難しい。内野から声がかかったことで、4番が打

球処理をした 1 番と内野の間に入り、ほぼ一直線でボールを中継することができたと考えられる。内野から白チームは 3 番、4 番、5 番は個々にアウトを取れる場所を考えて動いており、声がなくとも打球に応じて判断し、動き出していた。その一方で、内野からは外野の想定より 1 つ先の塁でアウトを取ろうとする場面もあり、外野はギリギリ間に合いそうな塁でアウトにしたい、内野は余裕をもって確実にアウトにしたいという意識があるように感じられた。大量失点がなくうまく守っていた白チームではあるが、意思疎通ができていればさらに失点を減らすことができるだろう。

・ゲーム記録（中継の動きがあった場面を抜粋）



右中間のかなり深い位置で 1 番が捕球する。左中間をマモッテいた 4 番が中継に入る。内野からの「ホーム」の声でほぼ一直線にボールを中継し、ホームでアウトを取ることができた。打球の飛距離を考えると、最小失点でアウトを取ることができていた。



センター後方に大飛球が飛び、4 番がボールを追いかけて守備位置よりも深い位置で捕球する。ライト寄りを守っていた 1 番が中継の位置に入る。打者はホームまで戻り、次の走者にリレーする。内野は 2 塁にボールを呼び、中継の指示を出す。間に入った 1 番と 4 番の距離が近かったため、4 番から直接 2 塁へ送球が渡り、失点を 5 点に収めた。

(4)振り返り

白チームはチームでの振り返りで以下の 3 つのことを記入していた。

- ・外野にとんでも 5 点でおさえられた
- ・内野がいる方にとぼしてくれる（返球のこと）
- ・間に入る人の判断も大事

ボールをうまく繋いでアウトを取ったことから、守備がうまくいったことを実感していた。チーム内での役割分担も明確で、それぞれに考えて動きながらチームとしても連携が取れていた。また、中継に入る際の中継者の位置の重要性にも気付くことができた。

2. 子どもの様子から

(1)本単元での教材化（手立て）の効果について子どもの様子から

①教材「フィルダー・ベースボール」

内野と外野が分かれていることで、守備の役割分担ができ、自分の役割を理解して守っている姿を見ることができた。内野プレイでは全員集合、外野プレイでは中継プレイが入ることで、守備の連動が求められ、全員がプレイに関与することができる。ルールは複雑であるが、子どもたちは状況に応じて考えてプレイできていた。

②ボール・用具

バッティングドリルの効果か、しっかりとボールを打つことができていた。また、外野プレイが多く出るようなボール、バットとなっていたと感じた。守備について考えるために様々な打球が飛んでくるということが重要であり、学習を支えていたと言えるのではないか。

③スクールタクトによるゲーム分析

実際にプレイするだけでは分からないこともあるが、記録を取ることで後から見返して考えることができ、自分たちの守備の動きを振り返るのに有効な手段であった。ベースボール型は打者が変わると一度プレイが止まるので、子どもたち自身で記録を取りやすいのではないか。

(2)ゴールイメージに迫るための単元展開及び教授行為について子どもの様子から

守備側のチームに求められる、どこでアウトを取るのか、内野と外野分担、間を抜かれる打球に対する守り方など段階的に経験ができる単元展開となっていた。また、攻撃側がボールを捉えた打撃ができるようなドリルを取り入れることで、守備について考える学習を支えていた。ゲームを重ね、ベースボール型のゲームに対する知識や技能が高まっていくのと同時に、新たな課題が生まれ、ゲームを通してさらに深めていける展開となっていたと感じた。

(3)ベースボール型における運動の楽しみ方を創り出している具体の姿

得点を取る攻撃の場面では、ボールを捉えて遠くや守備のいないところに打つことで得点を増やそうという姿勢があり、チーム内で声をかけ合っていた。守備では失点を少なくするための工夫をすることで、失点を減らせたことに対して手ごたえを感じている様子が見られた。守備側が主にボールを操作するベースボール型特有の楽しみ方であると感じた。

〈授業者反省〉

- ・ルールなど子どもたちと修正しながら進めてきた。1回目はタブレットに書かず、2回目終わったところで書くようにした。
- ・中継に入る子が思ったより多かった。上手い子と、そうでない子の差があったかもしれない。
- ・中継の距離と、加えて中継の修正について触れられれば良かった。

〈質問〉

箕輪北小 久保田：なぜ中継プレーを選んだか。評価基準でもかなり高いレベルと感じた。

柳沢：第3時ころから中継プレーについてはチラホラ話題に出てきた。白チームは野球経験者がいなくても失点が少ないゲームをしていたので、中継プレーを入れても大丈夫かと思った。

宮田中 清水：用具、ボール選びの意図

柳沢：キャッチしやすい、怖くないことを考えた。ボールの大きさも大きすぎるとボールが飛ばない。キャッチしやすく、ボールが飛ぶボールを選んだ。ドンキで購入。

西箕輪中 宮原：得点と勝敗に対するこだわりは

柳沢：第1時からあまり勝ち負けにこだわっていない。どちらかという点数を少なくする方に意識が向いていた。

〈本単元の教材化の効果について〉

宮田中 清水：内野プレーが少なかった。塁間を広くしてもいいかと思った。アウトかセーフのハラハラ間、ギリギリのプレーが生まれるとさらにいいと思った。

柳沢：今日はボールがよく飛んだ。塁間が短いので、早く塁に到着してしまう印象はあった。12mから13mなどに修正してもいいと思った。

村澤：単元を通して、バッティング技能が飛躍的に向上している。ドリル学習も効果的か。攻撃側の選択肢として内野プレーも生まれるかもしれない。

辰野西小 伊藤：授業の雰囲気良かった。青チーム。ICTが記録や見やすさがとてもいいと思った。苦手な女の子が、打つ方でも守る方でも、考えながらプレーしている姿が見られた。

伊那養護 伊藤：3番の女の子。作戦タイムの姿を見ると、2番の子の指示に反応して、3番の子に質問する姿が見られた。ゲーム記録の中から判断を共有しようとする姿が見られた。

赤穂東小：ジャッチのところなど、子どもたちの関係もとてもいいと思った。センター方向に飛んだボールに対して、具体的に見返しができるときっかけとなっていた。ICTは有効だったと思う。青の2番の子が指示を出していたが、上手い子に頼ってしまい過ぎる傾向があった。それぞれが自分たちで判断する力を育てるにはどのようにしたらよいかは課題か。

南箕輪中：5点と8点の違い。外野の守備体系。ベースカバー

南箕輪小 清水：チームでどこでアウトにするかの合意形成。判断が違った時もあったが、今のファーストいけたよねという声があった。もっといいプレーをしようとしていた。考えている姿が見られた。

辰野西小 柴：子どもたちの発言を担当が問い返しをした場面。教師の問い返しによって学習が深める場面が見られた。

赤穂小 中原先生：何が得点につながったか明確になれば。

西箕輪中 宮原：ジャンボミッキーの導入がいい。今後さらに勝敗も気にしていけるといい。得点の仕方にさらに工夫があってもいいかもしれない。授業のまとめは、いろんな形があってもいいと思う。

村澤：子どもたちが楽しみ方を作り出していく。単元前半でどれだけ主体的に深く学んでいく姿をつくれるか、それによって後半の学習の様相が変わってくると思う。